

李盛鐸舊藏『照明菩薩經』解題・翻刻

林 敏

I 解題

一、底本の書誌

本經のテキストは羽田記念館⁽¹⁾（現在のユーラシア文化センター）所藏の『羽田亨博士收集西域出土文獻寫眞』⁽²⁾ No.10とNo.23より翻刻したものを用了。なお、直接寫眞撮影ができなかったので、落合俊典教授手擇本を用了。『照明菩薩經』が經錄に最初に現れるのは『法經錄』⁽³⁾（五九四年）卷二「衆經僞妄」である。その後、『仁壽錄』⁽⁴⁾（六〇二年）、『大唐内典錄』⁽⁵⁾（六六四年）、『大周錄』⁽⁶⁾（六九五年）、『開元錄』⁽⁷⁾（七三〇年）、『貞元錄』⁽⁸⁾（八〇〇年）等に擧げられている。これらの經錄上では明確に疑僞經典として位置付けられていたものである。疑僞經典と判斷されたことが消滅する理由になったと考えられる。そして百年前に敦煌出土文獻の中に一度現れたが、再び姿を消してしまった。今回録文を採ることによって『照明菩薩經』の過半が明らかとなるであろう。

さてその經緯であるが、敦煌本蒐集家である清朝の高官李盛鐸⁽⁴⁾（一八五八〜一九三七）が關與していた。李盛鐸は、敦煌の殘卷を北京に運ぶ時に、職務（學部大臣）の便を利用して、多くの敦煌精品を私藏したといわれて

いる。其の中に『照明菩薩經』が含まれていた。落合俊典教授の研究によれば、李氏没後行方不明になった敦煌本は、第二次世界大戦期間、日本の某企業家が入手したという。幸いにも、日本の著名な中央アジア史家である羽田亨（一八八二—一九五五）博士の調査ノート、即ち『敦煌秘笈目錄』の中に『照明菩薩經』の情報資料が残っていた。そもそも、その企業家が日本圓の八萬圓で李盛鐸敦煌本を購入したようであるが、その後、その調査を當時の京都大學總長であった羽田亨博士に依頼したと推定される。『敦煌秘笈目錄』は、李盛鐸敦煌蒐集本を含めた敦煌寫本を調査した調査ノートである。羽田博士が業者に命じてその他の敦煌本も含めて寫眞を撮影した。本經の翻刻文はすなわちその寫眞撮影した羽田記念館所藏の『羽田亨博士收集西域出土文獻寫眞』932点の中の第10番〜23番撮影寫眞によって作成したものである。調査半ばにして、戦争激化にあった空襲を避けるため、十七箱に入れられた敦煌資料を兵庫縣多紀郡大山村に疎開した。戦後、ある時期に企業家に返却された。現在は日本の有名な企業に所屬する研究機関が所藏していると推察されるという。その調査ノート、すなわち『敦煌秘笈目錄』は、羽田亨博士から塚本善隆博士（一八九八—一九八〇）に托され、さらに牧田諦亮博士へ傳えられた。

現在、中国佛敎史家の牧田諦亮博士が保管されている。長く秘藏のままであったが、一九九八年牧田諦亮博士宅で開かれていた研究會で落合敎授等のメンバーに閲覧の機會が與えられた。この目錄に挙げられている敦煌經卷の總數は七三六點となっている。そのうち第一冊には、四三二點の書目があるが、これは王重民の『敦煌遺書總目錄索引』四、敦煌遺書散錄に載る「3、李氏鑒藏敦煌寫本目錄」（三六一點）⁶とほぼ同内容である。この目錄によって李盛鐸舊藏の敦煌本はほぼ概要が分かってくる。この『敦煌秘笈目錄』の第八四番、すなわち『照明菩薩經』は六朝人の書寫という記述がなされている。羽田記念館寫眞の『照明菩薩經』の第二紙の天界空欄に

「敦煌石室秘笈」

という陽刻印が見られる。尾題左下に李盛鐸の藏書印

「李盛鐸合家眷屬供養」

という陽刻印も押印されているというという。

二、法 量

羽田記念館所蔵の寫眞（『羽田亨博士收集西域出土文獻寫眞』九三二點）一〇番から二三番が本經である。尾題に『佛說照明菩薩經』とある。これはほぼ原寸大と想定され、一四枚の寫眞から書誌情報が概略得られるという。落合教授に依れば、現物を實見していないが解像度の高い羽田記念館の寫眞によって容易に六朝の優品と見なすことができるという。

それによると、本經は卷首を缺いているが、天地と縦に界線が整然と引かれ、一紙は二三行或は二八行で、全部で一〇紙繼がれている。——落合教授の手擇本から次のことがわかる。

第一紙…前缺ゝ2行（2行）。第二紙…3行ゝ30行（28行分）。第三紙…31行ゝ58行（28行分）。第四紙…59行ゝ81行（23行分）。第五紙…82行ゝ104行（23行分）。第六紙…105行ゝ127行（23行分）。第七紙…128行ゝ150行（23行分）。第八紙…151行ゝ173行（23行分）。第九紙…174行ゝ196行（23行分）。第十紙…197行ゝ207行（11行）。一行は一七字を基本として（一七字は一五八行、五字の偈で二十字は四九行、四字の偈で一六字は八行）、總じて二〇七行、およそ三千五百六十五文字を有する殘缺卷の寫本となっている。

三、先學の研究

先行の研究は松本榮一氏が『敦煌畫の研究』の第一章の第二節の「觀經變相における未生怨因緣圖相」に於いて、觀經變相の未生怨因緣圖相が、良忠の『觀經序文義傳通記』に見られる唐の龍興疏からの『照明菩薩經』の引用文によって、敦煌畫の觀經變相中の未生怨因緣圖相の出典は『照明菩薩經』に外ならないと指摘した⁽⁷⁾。

さらに近年落合俊典教授が、李盛鐸舊藏の『照明菩薩經』を紹介している。羽田亨博士の調査ノート『敦煌秘笈目錄』と羽田記念館所藏の『羽田亨博士收集西域出土文獻寫真』所藏の『照明菩薩經』を敦煌藏經洞發現百周年國際學術檢討會の際に公表し、以下の點を指摘している。

- ① 羽田記念館の寫真是、經錄に載っている疑偽經部類の中國撰述經典『照明菩薩經』である。
- ② 『照明菩薩經』は淨土教思想上重要な文獻である。
- ③ 成立年代は中國の佛性論争が登場した以降、すなわち少なくとも五世紀初頭から六世紀後半までの間に中國で成立したものである。

以上二氏であるが、矢吹慶輝博士も若干述べている。⁽⁸⁾

四、内容梗概

『照明菩薩經』は首缺であるが、内容構成は、傳統的な序分・正宗分・流通分の三段を有していないと見てよいだろう。登場人物は照明菩薩と佛、そして阿難と舍利弗である。内容梗概は、すなわち、煩惱無明の衆生は佛

性があるから、至誠に懺悔して、戒律を守り、因果を明らかにし、念佛して、般若正觀の光明を遍照して、色空不二の法門に入れば、佛の一切智の悟りの境地にいたることができるというものである。

まず偈頌がある。佛と照明菩薩の佛法問答の偈で、その内容は、もし煩惱無明の衆生が善を修せず、五戒を守らなければ、人身を保つことができないとする。

次に、長行文と偈頌が續く。萬法は心に従って生れ、意と眼耳鼻舌身等の識、數隨止觀還淨、十八不共法及び六十二見は皆心に従って生れるとする。したがって、誠心に懺悔すれば、罪障を滅して、地獄へと墮ちることは避けられる。そして無爲を安穩とすれば、常樂我淨という涅槃の境界に至ることができるとする。

つづいて、長行文がある。照明菩薩が佛に問いを發している。此の經を聞いて讀誦すれば、三途に墮さない。三明六通の一切智の佛境界を至ることができる。並びに阿難の問いに答えて、小乗は病に應じて藥を與えないとする。

その後、長行文並びに八句偈がある。阿闍世の殺父の因縁譚をあげ、罪を發露して懺悔すべしとし、因果報應の思想を強調する。

さらに、長行文がつづく。佛と衆生は壽命が等しくないけれども、一切の衆生に佛性があり、佛は母が子を憶念するように衆生を念じている。また、如來は不思議な大功德を持つことから、衆生が佛を念ずれば大なる利益を得られるとする。そしてこの經を聞いて讀誦すれば、惡知識は遠ざかり、善知識に親近すれば、心は鏡の中の影や水の中の月のようにして佛性を見ることができると説かれている。

最後に、長行文並びに偈頌がある。佛が照明菩薩に説示し、三乗は一乘に及ばない。もし十住菩薩の名と義を理解すれば、即ち菩提に至ることができる。そして、佛は照明菩薩に二百五十戒と三千威儀を傳授し、空と色の不二法門に入ること證している。

以上のように本經の思想内容は種々様々であるが、大乘思想の浄土・涅槃・般若・法華・華嚴・維摩など主要經典の影響を受けていることは明らかである。本經の最終の目的は佛の一切智の悟りの境地に至ることであるが、分類するとすれば、善惡報應の思想によって罪を懺悔して戒を守り、福を求める人天教の範疇のものである。

注

(1) 『羽田記念館の沿革』〈京大廣報』No. 360, 1988, 11, 15〉によれば、羽田記念館は出町柳から賀茂川沿いの賀茂街道を北西に約四km、上賀茂神社西方の北区大宮南田尻町にある京都大學文學部内陸アジア研究施設である。これは京都大學文學部教授（東洋史學）で第十二代總長でもあった故羽田亨博士の學問的業績を記念し、あわせて内陸アジア全域の歴史・言語・文化・社會・宗教などの研究を推進する目的で設立された。羽田博士は内陸アジア地域の諸言語に通じ、その豊かな言語學的造詣を北アジア・中央アジア諸民族の歴史研究に活用して、斯學の分野に未曾有の新境地を開拓した世界的な東洋學者であった。本施設所藏圖書は、博士専門分野に関する漢・蒙・回・滿の諸典籍をはじめ、中央アジア・西アジア地域に関するトルコ・ペルシア・アラビア・インドなどの諸語文獻および欧米の研究書・雜誌が中心であるが、東南アジア関係の書籍も若干架藏されている。藏書数は現在およそ九千冊餘りにのぼる。また、定例の活動として、春と秋の羽田記念館講演會がある。

(2) 『羽田亨博士收集西域出土文獻寫眞』では羽田亨博士が研究の一環として蒐集した寫眞九三二点大型のアルバム三二冊に貼り付けられている。李盛鐸旧藏敦煌本を始め、大谷光瑞旧藏本や天理圖書館藏本などが撮られている。（落合俊典「李盛鐸旧藏照明菩薩經探蹟」〈佛教學浄土學研究』二九〜三〇頁。二〇〇一年。永田文昌堂〉を参照。）

(3) 大正藏五十五卷に「照明菩薩經一卷」（二六頁下一七行）。

- (4) 林田清著『明清名家・藏書印』によれば、李盛鐸、字は嶺樵、或いは椒微、號は木齋、晩年慶嘉と號した。江西德化の人。光緒十五年（一八八九）の進士となり、翰林院編修・國史館協修・江南道監察御史・京師大學堂總辦・出使日本大臣・出使ベルギー大臣・出使各國政治考察大臣・山西提法使・山西布政使・山西巡撫を歴任し、民國にいたってから、大總統顧問・參政院參政・國政商權會會長を歴任した。李盛鐸は五十年の長きに亘って藏書を収集したと言われている。主要な蒐集は四期に分けられる。第一期は、光緒の初年、湘潭の藏書大家袁芳瑛の臥雪廬の珍籍を収めたこと。第二期は、日本に出使の時に、日本目録學家の島田翰（一八八一～一九二五）の助けを得て、多くの中國・日本・朝鮮の古刊本を入手したこと。第三期は、敦煌から敦煌寫本を北京に運ぶ時に、職務の便を利用して、多くの敦煌精品を私藏した時期。第四期は、楊氏の海源閣など各藏家が散出した秘籍を入手した。以上の所得と父祖の所藏と合わせて、盛時には、數萬點以上になっていた。『北京圖書館藏李氏書目』に、木犀軒の旧藏九、〇八七種、五八、三八五冊が収録されている。また、李盛鐸は『木犀軒收藏書目』、『木犀軒宋本書目』と『木犀軒元版書目』など目録を編修した。（林申清『明清著名藏書家・藏書印』北京圖書出版社。二〇〇〇年十月一六七～二一九頁と嚴佐之の『近三百年古籍目錄學要』。華東大學出版社。一九九四年。二〇一～二〇九頁を参照）
- (5) 落合俊典「李盛鐸旧藏照明菩薩經探蹟」（『佛教學淨土學研究』二〇〇一年。二三～三三頁）。同「羽田亨稿『敦煌秘笈目錄』簡介」（『敦煌文獻論集』遼寧出版社。二〇〇一年。九一～一〇一頁）。同「敦煌秘笈―幻のシルクロード寫本を探して―」（『華頂短期大學學報』第6號。二〇〇二年三月。十六～十九頁）を参照。
- (6) 王重民『敦煌遺書總目索引』三一九頁、その中に二百七十號に『佛說照明菩薩經』（六朝人書）あり。
- (7) 松本榮一『敦煌畫の研究』圖像篇四五～五九頁（東方文化學院東京研究所刊。昭和12年）。
- (8) 矢吹慶輝『鳴沙餘韻（解說篇）』第二部七一頁～七八頁。岩波書店。昭和八年。

- 5 不受五戒 誰知我苦辛
- 6 經八難苦 皆由此尊經
- 7 常自寂滅相 不可以言宣
- 8 佛道叵思議 方便隨宜說
- 9 衆生處處著 引之令得出 譬喻當得解 引汝至涅槃
- 10 一切聲聞衆 皆於身中見 是諸菩薩等 謂我有偏親
- 11 結中好明珠 不妄授與人 照明得此珠 前身有因緣
- 12 佛語照明言 衆生可易度 答言不可度 以何因緣故
- 13 可羞不可羞^(度?) 不可羞而羞^(度?) 我今見如是 佛言何以故
- 14 日夜恒懷愁 菩薩身如鏡 悉見世所有 諸佛智如水
- 15 洗却煩惱垢 一切諸塵勞 淨除無復有 能於諸經中
- 16 此經最第一 吾念世無常 人生要當老 盛去日衰羸

- 17 形枯如百草 憂勞百病生 坐起懷煩惱 吾欲畏是故
- 18 出家行學道 沈沒在欲中 何時當得道 如人不鑽木
- 19 今可得火不 如人不受戒 爲得人身不 佛言不可得
- 20 佛言意從心生。何以故。智從心滅。佛言、心轉
- 21 作意、意轉作識、用是心意識故。轉相入間、前
- 22 轉入眼、眼轉入耳、耳轉入鼻、鼻轉入口、口轉
- 23 入身、身轉歸心、是以萬物皆從心生。止觀還
- 24 淨、亦從心生。學地行者、須陀洹人、得一數禪、
- 25 生四梵天。斯陀含人、得二隨禪、生四光天。阿
- 26 那含人、得三正禪、生四淨天。阿羅漢人、得四
- 27 禪、生六妙天。以是義故、學得一數·二隨·三止·
- 28 四觀·五還·六淨。其法若此。是真實法。種種因

- 29 緣信解、善哉善哉、無虛妄也。十八不共法者、
- 30 一謂六波羅蜜、二謂八正道、三謂四等心。凡」(第二紙)
- 31 此十八事、不與聲聞・羅漢・辟支佛同、故言十八。
- 32 佛語照明菩薩言、善男子、六十二見、何等是
- 33 也。照明答言、六情三轉、三六十八、不知苦、不
- 34 知習爲甘。歷三世爲六十。不知盡、不知道爲
- 35 六十二見。佛言善哉善哉、若有善男子、善女
- 36 人等、聞是經名隨喜者。得幾所福。阿難答言、
- 37 甚多、無量^(無)□邊、不可思議。凡夫愚人、爲濁愛
- 38 所逼、造作衆惡、依因飲食、及以女色、諸結惱
- 39 熱、造作衆惡、身口意惡、所集三業、三世所作、
- 40 惡業不善、今於佛前、誠心懺悔、所作惡業、悉

- 41 皆滅盡、無有遺餘。所有地獄·餓鬼·畜生、不聞
42 其名、何況眼見。世世所生、常得見佛、聞法奉
43 衆、安隱快樂、即得涅槃常樂我淨、安隱無爲。
44 善哉善哉、無虛妄也。欲重宣其意、以偈報言。
45 殺生還自殺 世世累劫怨 受罪短命死 還作畜生身
46 或復作牛馬 被鞍穿鼻牽 償其宿責咎 永不聞佛名
47 五戒服人身 鯁^(轉)責墮畜生 眼見善惡事 故作衆罪行
48 愚者觀其身 智者觀其因 亦如種五穀 皆由於前身
49 今身貧窮者 前身是富人 所以得此報 皆由種行因
50 惜穀不自食 惜物不作衣 欲望得盈長 慳貪惜與人
51 一旦無我身 鬪亂後頭人 強健不作福 復不肯持齋
52 羞不肯禮佛 死則入泥梨 影曲身亦曲 身直影曲難

- 53 惜物不自與 何況世間人 死入地獄中 是故世世貧
- 54 忍辱得端政 瞋恚得醜陋 慳貪墮貧窮 布施得大富
- 55 復見飲酒人 今世其身癡 行步似醉者 語言不成辭
- 56 死墮地獄中 皆由前身時 坐守財物死 眞實是大癡
- 57 照明菩薩重白佛言、我等若得聞是經者、將
- 58 來獲得六通三明、及八解脫、亦復非是聲聞・」(第三紙)
- 59 羅漢、心力所及、智力所知、非佛智力無能知
- 60 也、聲聞・羅漢力不所及。佛言、若有善男子・善
- 61 女人等、聞此經者、七日七夜、轉讀此經、終不
- 62 虛也、今世後世、不見地獄・餓鬼・畜生。何以故、
- 63 聞此照明經故。阿難白佛言、云何如來以小
- 64 乘法、而見濟度。佛語阿難、所以然者、應病付

- 65 藥、而得服行。阿難重白、是事不然。何以故、如
66 來等心、不應差別。佛言、是事不然、衆生不平、
67 故我不平。以^(順)□衆生、故無違逆。
68 照明菩薩白佛言、往昔阿闍世王、有害父之
69 罪、今於佛前、發露懺悔、得滅罪不。佛言得滅。
70 何以故、往昔、湍沙王治國、無有太子、即召相
71 師、問曰、夫人何時、當有身體、相師瞻曰、山中
72 有一坐禪道人、命終精神、當來入夫人腹中、
73 化作太子。王聞是語、即時遣人、斷道人糧、^(望)忘
74 得早終。道人有神通力、預知王意。我今爲王、
75 現作死相、化作白兔、在王東園裏、王將人民
76 士衆捉得、白兔復未死、方便殺之。即勅鍛師

- 77 鍛作鐵釘、釘兔四足、及頭鼻口、兔卽病釘而
 78 死。精神便來夫人腹中、化作太子。十月以滿
 79 而生太子、長大置立受位、太子將從遶城遊
 80 觀。迴來入城、卽作惡念、共諸臣密生惡計、卽捉
 81 父王、擲着獄中、不聽^(餉)飢食。^(章)違提夫人、以夫情」^(第四紙)
 82 重、蜜塗身衣、使不人見、白守獄者、聽我入中、
 83 獄吏卽聽而入、便解身衣、以手拔簪、削蜜與
 84 王、王得蜜食、眼目精明、夫人白王、未死之間、
 85 雖在獄中、稱佛名字而禮、^(章)泚沙王用違提夫
 86 人語、在獄中禮佛。阿闍世王、問獄吏言、獄囚
 87 何似、獄吏答言、獄囚平安、但見隨時獄中禮
 88 佛。臨渴穿井、不解時急。阿闍世王、卽召鍛師

- 89 鍛作鐵釘、釘王額上、及兩手掌、竝兩膝頭於
- 90 是汧沙王、不得禮佛、病釘而死。佛語阿難、天
- 91 下萬物、無不報者、作善得善、爲惡受殃。思之
- 92 念之、惡不可作。
- 93 色白不過雪 色黑不過漆 人貴不過王 味貴不過蜜
- 94 此照明經者 經中最第一 十二部經中 照明經第七
- 95 照明菩薩重白佛言、一切衆生皆有佛性、壽
- 96 命等不。佛言、性同壽命不等。何以故。汝聞我
- 97 壽命長短、不可思議。性同行異、亦不可思議。
- 98 若欲知者、我今語汝、四大海水、可知滴數、無
- 99 有能知世尊受命。諸須彌山可知斤兩、無有
- 100 能知世尊壽命。虛空分界尚可知盡、無有能

- 101 知世尊壽命。一切大地可知塵數、無有能知
- 102 世尊壽命。若欲知者、其事亦難、非聲聞・羅漢
- 103 等學地行者、心力所及、智力所知。若欲知者、
- 104 亦不可思議、非佛智力無能知也。 ─ (第五紙)
- 105 照明菩薩重白佛言、一日作惡佛亦知之、一
- 106 日作善佛亦知之。我今教汝、方便作善、莫如
- 107 常時、不受我教、方便作惡、是則大癡。我念汝
- 108 等、何日忘之、如母憶子、無有息時、佛念衆生
- 109 亦復如是。佛語阿難、此經難聞、若未聞未見
- 110 照明經時、如民失王、如囚在獄、如病難差、如
- 111 渡失船、如母失子、如子失母、如鹿失羣、如魚
- 112 失水、如男失婦、如女失夫、如寒失火、如貧失

- 113 衣、如彌猴失樹、如犢子失母、如是種種、何日
114 忘之、是以之故、思之念之。佛念衆生、亦復如
115 是。照明菩薩重白佛言、如來常住法僧亦然、
116 不可思議。佛有十力、四無所畏、十八不共法、
117 三明六通、及八解脫、一切種智、靡所不達。如
118 來身者、是真金剛無所畏。亟如師子王、或有^(?)
119 邪魅魍魎、誰敢誰當。九十六種、雖有是力、亦
120 不能當。如來身者、譬如松柏、不畏雪霜、冬夏
121 不變、始有精光。如來如日出、外道如雪霜。
122 佛言、若有善男子·善女人等·及四部衆·比丘·
123 比丘尼·優婆塞·優婆(夷)等、若有得聞此照明經
124 者、如民得王、如囚出獄、如病得差、如渡得船、

- 125 如母得子、如子得母、如寒得火、如貧得衣、如
- 126 魚得水、如鹿得羣、如男得婦、如女得夫、如彌
- 127 猴得樹、如犢得母、如遠行得歸。如是種種思」(第六紙)
- 128 想、心莫忘之。佛念衆生、亦復如是。方便具足、
- 129 思想修道、一無所犯。適其所願、即得涅槃、常
- 130 樂我淨。誰能知之、唯佛知耳。聲聞・羅漢力所
- 131 不及。四部之衆、皆言善哉善哉。願聞願見照
- 132 明經者、世所生、常得見佛、聞法奉衆、皆大
- 133 歡喜、六根清淨、身心常安、眼耳鼻舌六根、衆
- 134 相具足、面貌端政、手足濡軟、無有一事不好
- 135 之相。何以故。皆由得聞照明菩薩經故。佛語
- 136 阿難、人心不同、或販肉自活、街賣女色、如是

- 137 之人、皆莫親近、或有獵師枉殺衆生、死入地
138 獄、永不聞法、如是之人、亦莫親近。若有智慧、
139 了達諸經、深解妙義、如是之人、皆應親近。若
140 有利根智慧聰明、如是之人皆應親近若有
141 問難、隨義而答。一切諸法、空無所有。無有常
142 住、亦無起滅。能解此者、如是之人、皆應親近。
143 遠惡知識、親近善友、則是大利。如人舉鏡、自
144 照面像、了了分明。如來見諸衆生罪福亦爾。
145 如人作福、如影隨形、作者而得、不作不得。如
146 人在水、上見水中月、照明菩薩見佛性、亦如
147 是。
148 照明菩薩白佛言、頗有人說、此經中虛妄、罪

- 149 生誹謗不。舍利弗言、無虛妄也。佛言、云何方
便語、況復餘人、不虛妄也。世尊前言、汝等出」(第七紙)
- 150 來、當與三車、今不見一、豈可非是世尊生妄
語乎。佛言不也。何以故。我欲將汝入於涅槃、
151 離苦難故。以是因緣、無有虛妄。我今爲欲利
152 益世間、故說若得聞是照明經者、不墮地獄·
153 餓鬼·畜生、三途八難、苦惱之處、眼亦不見、耳
154 亦不聞。聞者生天。何況自讀、轉教餘人。
- 155 佛告照明菩薩言、善男子、我今乃至、不與最
156 小一車、猶不虛妄也。我先所許羊車·鹿車·大
157 牛之車、猶不虛妄。何以故。令得解脫、始知真
158 實、無虛妄也。照明菩薩對曰、我今無有威德

- 161 勢力、雖得聞是甘露淨法、心不希取一豪之
162 善、一餐之味。照明白佛言三乘雖多、不如一
163 乘、得近如來、入如來舍、共如來宿、肩所荷負、
164 得至泥洹、適其所願。
- 165 照明菩薩重白佛言、自知心小、少智無方、應
166 物樂著小乘、不能了達菩提正果、不能自度、
167 何能度彼。唯佛智力、乃能度也。復見十住菩
168 薩名字、第一發意、第二持地、第三應行、第四
169 生貴、第五修成、第六行等、第七不退、第八重_(童)
170 眞、第九了生、第十補處。是爲十住菩薩之名。
171 若得聞是十住之名者、復解十住義、數解十
172 住義數者、即是菩提、更無有也。

- 173 佛語照明言 汝從何方來 照明答世尊 從於下方來」(第八紙)
- 174 始經十餘年 是諸四衆等 未曾見我身 所將家眷屬
- 175 皆於身中見 其數滿十者 餘悉不能知 粟果成天地
- 176 芥子盛須彌 神力得如是 故號不思議 粟果喻眼精
- 177 僮兒喻芥子 能盛諸城郭 及諸城內裏 芥子相客時
- 178 方便亦如是 譬如大數法 億兆京潤陔(種) 若解此數者
- 179 溝(壘)褰(澗)滿正載 智度菩薩母 方便以爲父 一切衆道師(導)
- 180 無不從是生 法喜以爲妻 慈心以爲女 善心誠實男
- 181 畢竟空寂舍
- 182 照明菩薩 重白四方 四佛世尊 東方阿閼
- 183 南方寶相 西方無量壽 北方微妙聲 此四如來
- 184 隱形不現 擁護四方 國主人民 稱我名者

- 185 我皆擁護 南閻浮提 西俱耶尼 北鬱單越
- 186 東弗于逮 此四天王 各有名字 北方天王
- 187 毘沙門 東方天王 提頭賴吒 南方天王
- 188 毘留勒叉 西方天王 毘留博叉 是四天王
- 189 各領一方
- 190 佛語照明菩薩言、善男子、我今教授、真實要
- 191 法、汝等深思細念、勿妄宣傳、我知汝意、無令
- 192 漏失。佛言我授汝二百五十戒、三千威儀。二
- 193 百五十戒者、色有五陰、痛痒亦有五陰、思相^(想)
- 194 亦有五陰、生死亦有五陰、識中亦有五陰、五
- 195 五二十五五陰、若有身本、若有十事、合爲二
- 196 百五十事、計內外合爲二百五十戒。是五百^(第九紙)

- 197 事、轉相入間、前轉入眼、眼轉入耳、耳轉入鼻、
198 鼻轉入口、口轉入身、身轉入意、如是六門、各
199 有五百、五六合爲三千威儀。此事不可妄授
200 與人。從癡有愛、則我病生、一切衆生病是故
201 我病、一切衆生病滅則我病滅。譬如長者、唯
202 有一子、其子得病、父母亦病、其子病愈、父母
203 亦愈。佛語衆生。亦復如是。
- 204 照明菩薩白佛言、色非常色、何以故。色性自
205 空、非色滅空。受想行識、本性亦空、乃至無有
206 文字、語言道斷、是真入不二法門。誰爲是色、
207 色既無根、彼此俱無、豈不虛也。 ─ (第十紙)

佛說照明菩薩經

印

【校註】

1行…□香請道□「香」の上の字に殘畫および「道」の下の字にも殘畫が見える。加えて、本經と共通する本文を有する『佛說妙好寶車經』（以下『寶車經』）に「燒香請道人」（大正藏八十五卷一三三五頁中）とあることよって二字を推定した。

2行…□便喚佛「便」の上の字は字形によって「將」と推定した。

閑□□□□「閑」の下の四字には左半分程殘畫が見られる。この内、下の三文字は『寶車經』の「求魔神」（大正藏八十五卷一三三五頁上十五行目）と一致すると思われる。「閑」の次の字は殘畫から「便」の字のように思われるが、意味が通じない。

3行…□□□羅王「羅」の上の一字は下半分の殘畫が見られる。加えて意味内容から「閻」と推定した。

6行…□經八難苦「經」の上の一字は僅かの殘畫すら見えないが、『寶車經』の「不經八難苦」（大正藏八十五卷一三三五頁上）とあることから「不」とすることも可能である。

8行…□□□□生「生」の上の一字は殘畫と意味内容によって「衆」と推定した。

9行…天界に「敦煌石室秘笈」の方形陽刻印が押印されている。

23行…「正觀還淨」後漢安息三藏安世高譯の『佛說大安般守意經』には「數息相隨止觀還淨」（大正藏一〇卷一六六頁上段三）とあり禪の六事の三番は「止」に配している。「正」を「止」と推定した。正と止の異體字は相似しているので誤寫したのである。

27行…「正」 23行と同じく「止」と推定した。

37行…「無量□邊、不可思議」 偈文の形式で『添品妙法蓮華經』卷二に「無量無邊、不可思議」（大正藏九卷、

一五一頁下九〜十行）とある。意味内容からも「無」としても大過ないだろう。

47行…「五戒服人身 無責墮畜生」「無」は『康熙字典』によれば、「無」は即ち「觸」字である（講談社、二五九四頁）。また、中國撰述經典の『妙法蓮華經馬明菩薩品』に

十善得生天 五戒服人身

十惡墮地獄 低突墮畜生

忍辱得端政 瞋恚得醜陋

布施得大富 慳貪墮貧窮（大正藏八十五卷、一四二八頁下段十一〜一四行）

とある。この偈の「低突墮畜生」の「低突」は脚注によれば「低突」・「低突」とも書く。慧琳の『一切經音義』卷第十六には「低突 上丁禮反。大戴禮云低猶推也。考聲拒也。說文觸也。從手氏聲也。氏音同上也。下徒鶴反。王逸注楚辭云凌也。韻詮云衝也。說文犬從穴中忽出從犬在穴中會意字也」（大正藏五四卷、四〇五頁上二二行）とある。「觸」即「觸犯」の意味である。以上二つ理由で「觸」と推定した。

67行…「以□衆生」 □の殘畫はつくりが「頁」に見える。意味内容によって□を「順」と推定した。

73行…「忘得早死」、「忘」は意味をなさない。恐らく「望」を「忘」に誤寫したのである。

81行…原文は「𠂔」であるが、張涌泉著『敦煌俗字研究』によれば、「𠂔俗、𠂔今、飼正。」（『敦煌俗字研究』上海出版社。一九九六年。六三九〜六四〇頁）とあり、𠂔の正字は飼である。

81行…原文は「違提夫人」であるが、大正藏に見えない。これは通常「韋提夫人」とするものである。恐らく「韋」を「違」に誤寫したのである。

111行…原文は「船」であるが、蔡忠霖著『敦煌漢文卷俗字及現象』と黄象征・張涌泉著『敦煌變文校註』（中華書局、一九九七年一一一〇頁）によれば「船」の異體字は「舩」であるから「船」とした。

118行…原文は「𤑔」である。

136行…原文は「宀」、蔡忠霖著『敦煌漢文卷俗字及現象』によれば、「肉」字の俗寫であるという（文津出版社、二〇〇二年、一八六頁）。

137行…原文は「獺」、蔡忠霖著『敦煌漢文卷俗字及現象』によれば、「獵」字の俗寫であるという（文津出版社、二〇〇二年、一九四頁）。

169行…原文は「重」であり、その「重」のしたに「灬」の記号も見られるが、何を意味するのか、不明である。殆ど同様内容である大正藏の支謙譯『菩薩本業經』は、「今使汝說菩薩。十住。令諸學者普知所行。於是法菩薩。得佛辯辭。明哲至真。不忘不難。從定意覺而言曰。諸族姓子。欲求佛者。有十地住。往古來今。皆由此成。衆祐所歎。是合無量。具陳演說。如佛所言。何等為十。第一發意。第二治地。第三應行。第四生貴。第五修成。第六行登。第七不退。第八童眞。第九了生。第十補處」（大正藏十卷四九九頁下段十一〜十九行）と十住菩薩の第八は「童眞」であるとしており、ここでは、それによって「童」と推定した。

178行…原文は「潤」であるが「秭」の記憶違いであろう。次項参照。

179行…原文の「溝裏滿正載」では意味が通じない。誤寫や倒置などのために意味不明となったのであろう。この文章とよく似た表現が法雲（一〇八八〜一一五八）編の『翻譯名義集』卷三の數量篇に「俱舍論五。（卷）十二。數皆從一增至十也。謂一。十。百。千。萬。洛又億也。度洛又兆也。俱胝京也。未陀秭也。阿庾多垓也。大阿庾多瓊也。那庾多溝也。大那庾多澗也。鉢羅庾多正也。大鉢羅庾多載也。（中略）算經。黃常為數法有十等。億。兆。京。秭。垓。壤。溝。澗。正。載。」（『大正藏』五四卷一一〇六頁中段〜下段）と出て

いる。どうやら数の多數なるを言おうとしているようである。「溝裏滿正載」に関連する「壞。溝。澗。正。載。」は『孫子算經』に出典が求められる。そこには「萬萬曰億、萬萬億曰兆、萬萬兆曰京、萬萬京曰陔、萬萬陔曰秭、萬萬秭曰壤、萬萬壤曰溝、萬萬溝曰澗、萬萬澗曰正、萬萬正曰載。」(微波榭叢書所收の唐李淳風等奉勅注釋の『孫子算經』上卷二頁下)とあり大数の順次が明らかになっている。『照明菩薩經』の文が巨大な数を表現したものと假定すれば、倒置と誤寫の混融した結果と言えるだろう。つまり、「溝裏」(『照明菩薩經』)は「裏」が「壤」の誤寫であり、さらに記憶の間違いから倒置となったものと想定される。つぎの「滿」(『照明菩薩經』)は原著者の記憶違いと考えるよりも「澗」を「滿」に誤寫したと想定したほうが無難なように思われる。

179行…原文は「道」であるが、意味によって導と推察した。

193行…原文は「思相」であるが、意味内容をなさない、恐らく「想」を「相」に誤寫したであろう。

尾題…尾題左下に李盛鐸の藏書印「李盛鐸合家眷囑供養」という陽刻印も押印されている。

異體字一覽表（異體字は筆者が草したものである）

（異體字） 暖 章 得 戒 霞 辟 解 回 惚 寂 裏 宥 沉 蒼 哉

（正漢字） 喚 章 得 戒 處 譬 解 因 惱 最 裏 寂 沈 答 哉

（異體字） 斂 鞞 各 鯁 齧 无 逆 菌 鼻 屨 狠 完 獨 塗 漆

（正漢字） 殺 鞍 咎 觸 穀 無 逆 園 鼻 屨 貌 肉 獵 泥 漆

（異體字） 𠂇 湏 舩 勅 兔 粮 飢 簪 頰 礼 瞻 膝 橫 捉 熹

（正漢字） 亦 須 船 勅 兔 糧 飼 簪 額 禮 瞻 膝 鑽 捉 喜

（異體字） 墉 慎 鬱 留 吒 對 宮 冷 裏 滯

（正漢字） 郭 順 鬱 留 吒 剛 害 餐 里 滴

and to free himself, as the Zhaoming Pusa did.

2. Line 20 to line 56: mention all phenomena 萬法 i.e., the five senses and consciousness, the six aspects 六事 of the mindfulness of breathing, the eighteen characteristics peculiar to the Buddha, and the sixty-two perverted views, etc., arise on the basis of mind. If one sincerely confesses his sins to the Buddha, he will not fall into the hell.

3. Line 57 to line 67: the Zhaoming Pusa asks the Buddha about chanting this sutra and praying to the Buddha. The Buddha says it can prevent followers from falling into the Three Bad Destinies 三途, and help them to obtain Buddha's wisdom.

4. Line 68 to line 94: relate the story of Aṣatāśatru's killing his father. The sutra teaches us that sincere confession can help to get rid of one's sins. It serves as an emphasis of the idea of retribution.

5. Line 95 to line 147: the sutra stresses that all living creatures have the Buddha-nature in their minds. If they listen to or chant this sutra, they will surely attain wisdom.

6. Line 148 to line 207: the Buddha explains why and how one can obtain the Dharma power and teaches the Zhaoming Pusa 250 discipline rules and three thousand monastic regulations 三千威儀.

II. The text of the *Zhaoming Pusa jing* as contained in Li Shengduo's Collection : please refer to the Japanese version of this paper p.8-35.

*Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*

1. the *Zhaoming pusa jing* is listed a “Suspicious or Apocryphal Sutras” in the traditional catalogues.

2. The *Zhaoming pusa jing* is an important historical document for the Chinese Pure Land Buddhism.

3. The sutra was compiled during a period of intensive debates on Buddhist philosophy, between early 5th and the middle 6th century.

D. The contents of the *Zhaoming Pusa jing*

The opening part of the *Zhaoming Pusa jing* is missing. But we can see that its organization is different from the traditional three-part style: preface, purport and entrusting the circulation of the sutra. It consists of questions and replies between the Zhaoming Pusa and the Buddha. Ānada 阿難 and Śāriputra 舍利弗 appear twice. Its doctrinal contents are very complicated, showing influences from such classical sutras as the *Pure Land*, *Nirvāṇa-*, *Prajñāpāramitā-*, *Saddharmapuṇḍarīka-*, *Avataṃsaka-*, and *Vimalakīrti-sūtra*. Its main tenet is that the Buddha-nature already exists in everyone’s mind. Everyone can reach the highest destination of great wisdom and enlightenment if one sincerely confesses one’s sins to the Buddha, strictly obeys religious regulations, believes in retribution, chants the scriptures and the name of the Buddha, bathes in the Prajñā brightness, and enters the Buddha-nature. The purpose of the sutra is to help the common believer to find wisdom and enlightenment, and also to promote morality with the hope of finding happiness in this life and the next rebirths. It can be divided into the following sections:

1. From the beginning to line 19, there are questions and replies between the Zhaoming Pusa and the Buddha. The main teaching is that if a man does not practice love-kindness and obey religious regulations, he cannot maintain his human existence, will not become enlightened and cannot free himself. It will be impossible for him to get enlightened

Museum and called “Dr. Haneda’s Description of the Collections of Historical Documents Unearthed in the Western Regions” contains photographs No.10-23 which end with the characters “the *Foshuo Zhaoming Pusa jing*”. The size and shape must be similar to the original text. This manuscript has only one scroll. Its cover folio missing, and it is neatly written in regular-style calligraphy, with some traces of lishu style. One page contains 23 lines to 28 lines. The details are as follows:

On the 1st page there are 2 lines (missing line to line 2); on the 2nd, 28 lines (line 3 to 30); on the 3rd, 28 lines (line 31 to 58); on the 4th, 23 lines (line 59 to 81); on the 5th, 23 lines (line 82 to 104); on the 6th, 23 lines (line 105 to 127); on the 7th, 23 lines (line 128 to 150); on the 8th, 3 lines (line 151 to 173); on the 9th, 23 lines (line 174 to 196); on the 10th, 11 lines (line 197 to 207). there are 158 lines with each 17 words, 49 lines with 20 words, and 8 lines with 16 words, thus the 207 lines, have a total of 3,565 words.

C. Previous Research on the Sutra

Mr Eiichi Matsumoto 松本榮一 was the first scholar who studied the sutra. In his *Dunhuang huade yanjiu* 敦煌畫的研究 chapter I, section II, there are several pictures, one of them being Ryōchū’s 良忠 “*Guang jing xu wen zhuan tong ji* 觀經序文義傳通記” which cites part of the *Zhaoming Pusa jing*. Huiyuan, Zhiyi, Jicang, Shandao also list and make comparisons in their notes. They conclude that the pictures are from the *Zhaoming Pusa jing*.

In his ground-breaking contribution at the International Conference commemorating the 100th anniversary of the discovery of the Dunhuang caves, Prof. Ochiai discussed the *Zhaoming pusa jing* and Dr. Haneda’s depiction “A Catalogue of Dunhuang Secret Works”. He comes to the following conclusions:

text was bought by a Japanese businessman during World War II. It was then stored in an institution of a certain Japanese company, but it was not made accessible to the public. Fortunately, a well-known Japanese historical linguist, Dr. Tōru Haneda (1882-1955), was allowed to research the text and recorded it in his description: “A Catalogue of Dunhuang Secret Works”. Dr. Tōru Haneda’s study was also included in his Catalogue. He also had the text block-printed. This edition is based on photocopies of Dr. Tōru Haneda’s collection photocopies No.10-23, P932. During World War II, research had to stop, and the 17 cases of the collection were transferred to Hyōgo-ken, Taki-gun, Ōyama-son 兵庫縣多紀郡大山村. Later Dr. Tōru Haneda committed them to the care of Dr. Zenryū Tsukamoto 塚本善隆 (1898-1980), and Dr. Zenryū Tsukamoto to Dr. Tairyō Makita 牧田諦亮.

In 1998, Dr. Tairyō Makita agreed to make public the Catalogue of *Dunhuang Secret Works*. Prof. Ochiai has published a series of studies on this collection. The catalogue has two volumes. In volume I, it records 736 works, and volume II lists 432 texts. This represents the same amount as Mr. Wang Chongming’s *Lishi jianchang dunhuang xueben mulu* 李氏鑿藏敦煌寫本目錄 of the *Dunhuang yishu sanlu* 敦煌遺書散錄 of the *Dunhuang yishu zongmulu suoyin* 敦煌遺書總目錄索引. From Dr. Haneda catalogue we can get a general idea about Li Shengduo’s original text. No. 84 of the catalogue says: “the *Foshuo Zhaoming pusa jing* written in the Six Dynasties.” The margin of page 2 of the photographs (No.10-23) of the *Zhaoming pusa jing* stored in Haneda Museum has a seal stating: “Dunhuang Stone Cave Secret Works”. On the left bottom on page 10 there is a seal reading “Li Shengduo, my family and my relatives make offerings to the Buddha.”

B. Format of the *Zhaoming Pusa jing*

The above mentioned depiction which is stored at the Haneda

Summary

The woodblock-printed Text of the *Zhaoming pusa jing* 照明菩薩經 in Li Shengduo's Collection

LIN Min

I. Brief Introductory Study

A. A survey of the original text

The information about the original text is based on the photocopies (No. 10-23) of “Dr. Tōru Haneda’s 羽田亨 Description of the Collections of Xiyu Unearthed Historical Documents” stored at Haneda Museum. But as I had no access to the photos myself, I had to rely on Prof. Toshinori Ochiai’s 落合俊典 own handnotes.

The *Foshuo zhaoming pusa jing* first appears in the Suspicious or Apocryphal Sutras section of the *Fa jing lu* 法經錄 scroll 2 (594A.D). Later, it is mentioned in the *Ren shou lu* 仁壽錄 (602), *Datang neidian lu* 大唐內典錄 (664), *Da zhou lu* 大周錄 (695), *Kai yuan lu* 開元錄 (730), *Zheng yuan lu* 貞元錄 (800), etc. In all these, it is considered as a suspicious or apocryphal sutra. Because of this reason, it did not appear in the official Canon for more than a thousand year until it was discovered at Dunhuang. However, the text has not been published so far.

In fact, it had something to do with the famous Dunhuang collector Li Shengduo 李盛鐸 (1856-1937) who was a high official during the Qing Dynasty. Li took advantage of his position and privately stored and collected many works discovered at Dunhuang. This sutra was among those texts. According to Prof. Toshinori Ochiai’s research, the